

新年あけまして

おめでとうございます

令和6年あけましておめでとうございます

広川町内のみなさまには、お健やかに新年をお迎えのこととお喜び申し上げます



日頃は、「稲むらの火の館」の運営に御協力と御支援をいただき厚く御礼を申し上げます。

新型コロナウイルス感染拡大で、諸々の行動が制限されていましたが、やっと昨年から緩和されました。日常の行動も平常に戻って参りました。ただ、当館の来館者総数はまだまだ以前の状態に戻ったとは言えない状況です。

そうした中でも、昨年は「第2回和歌山県人会世界大会」参加の方々約170名が来られました。また、「日越外交関係樹立50周年記念ベトナム・クアンナム省高校生招へい事業」で、ベトナムの高校生等が25名来館されました。その他でも、外国からのお客様が、よくお見えになっています。

「濱口梧陵国際賞」も第8回目を数え、昨年は団体受賞のチリ国立自然災害管理総合研究センターの研究者の皆様も来館されました。

このように、「世界津波の日」が制定されて以来、外国からも大勢の皆様が来館されています。

「稲むらの火の館」が津波防災のシンボルとして、位置づけられているということを感じています。1854年の「安政地震・津波」という昔の災害を伝承している当館としては、津波災害を体験している人が居ないというハンデがありますが、その分長く伝承し続けているという強みもあります。

もちろん、この災害を長く伝承し続けている中心には「濱口梧陵翁」という偉大な人物と、「稲むらの火」という優良な教材の存在は忘れてはなりません。「稲むらの火の館」の職員一同は、本年もこの基本の考えを忘れず努めて参ります。

「ど根性ひまわり」の種を配布します

令和5年5月に、「稲むらの火の館」の庭園にあった「百日紅(さるすべり)」の木を、「ともだちの樹」として、宮城県石巻市「震災遺構大川小学校」へ植樹しに行ってきました。その時の事は、「やかただより6月号」で報告させていただきました。その際、石巻市内等の他の震災遺構や伝承施設を見学してきました。

そうした時に、「ど根性ひまわり13世」という名のついた、ひまわりの種を1袋いただいて帰りました。このひまわりの種は、2011年の東日本大震災で大きな被害を受けた石巻市に流れて来た木材で、「がんばろう! 石巻」という看板を立てたそうです。その年の夏、その看板のそばで津波で流れ着いた一粒のひまわりの種が芽を出し、花を咲かせたそうです。津波にも塩害にも負けずに咲き、たくましく生きるひまわりは「ど根性ひまわり」と呼ばれるようになりました。

このひまわりは、毎年花を咲かせ、たくさんの



種子を配布されてきました。昨年、いただいてきた一袋の種には、2023年に咲けば13世になります、と書かれていました。2023年夏、広川町で花を咲かせてくれました。この種を収穫したので、皆様にお分けしたいと思います。

「ど根性ひまわり14世」と名付けました。2024年に咲かせると、第14世になるということです。

「ど根性ひまわり」の使命は、未来の自然災害で犠牲者を出さないことをアピールすることです。

この種は「稲むらの火の館」に置いていますので、興味のある方は取りにお越しください。

# 百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

## 第34回 贅沢なリスク

この原稿は、2023年11月8日に執筆している。2024年の初頭に、我々は未来に対して何を展望することができるのだろうか。

いまも世界のあちこちで、リアルな「戦争」が続いている。無辜の市民が「大義」の名のもとに殺されている。政治も経済も科学も宗教も、だれも救ってくれやしない。それどころか、この地球上で、日常をサバイバルしている人の比率のほうが増えてきているのではあるまいか。

グローバル社会が「開かれている」というのは明らかに“虚偽申告”である。グローブ (globe) とは、すなわち球形のこと。球面はひとつながりになっていて、一周まわれば元の場所にたどりつくだけだ。そんなことは小学生でも知っている。グローバル社会は物理的に「閉じている」。その限られた空間内において、我々は知恵をしばって共存していくしかない。逃げ場所などないのだ。

筆者は、普段は情報学の観点から、防災・減災に取り組んでいる。ところで、ターゲットとしている「災害リスク」は、他の領域からは「贅沢なリスク」(luxurious risk) だと言われる。戦地において、将来の災害リスクを想定することなど、浮世離れした仕草に過ぎない。爆弾が降り注ぐなかで、生きるか死ぬかの境地にある人に、地震や津波の話をするのはナンセンスなのだ。

そして、実は戦地に赴かなくても、この日本社会の片隅で、残酷な日常を生き抜いている人たちが大勢いる。貧困、虐待、いじめ…。絶望の淵に居る人からすれば、「防災なんて日々の暮らしに余裕がある人がやることだ」と思うに違いない。

確かに、そうだ。しかし、まさにそうした人たちのためにも、セーフティネットの網の目を細かくしていく必要がある。それが「真の防災」だ。有限の世にあってこそ、無限の挑戦を為すべし。まだまだ、やるべきことはある。

## 【館長日記】

新型コロナウイルスについて、昨年5月から季節性インフルエンザなどと同じ感染症法に規定される5類感染症に移行されました。これにより、減少していた大人の団体の来館が戻ってきました。特に、自治会や自主防災組織、民生委員の団体見学が目立って来られています。

そうした団体が、3階ガイダンスルームで注目されるのは、昨年7月から設置している「花王」の展示です。避難所に必要と思われる“衛生用品”や“生理用品”の展示です。この間、来られた自治会の役員さんが、ガイダンスの後、このコーナーでじっくり話されました。自治会の避難用備蓄品として何を置くか、役員で相談したが、これらは思い当たらなかった。でも、これは絶対必要ですね。ということで喜ばれました。



「花王」の澤田会長さんがお見えになりました。澤田会長さんは、社長をされていた平成30年頃から、お付き合いのある大企業の社長さんや会長さん等役員さんをご案内されて、来館されています。この度も、大会社の役員さんを案内されて御来館されました。お久しぶりの御来館ですが、どうしてもご覧いただきたい所ですと言って、この“衛生用品”や“生理用品”の展示コーナーへご案内いたしました。会長さんは、花王製品を展示していただいている、ということであたいへん喜んでいただきました。「稲むらの火の館」もこうした展示は全国でここだけということですので、そのことを自慢していますと申し上げました。

こうした衛生用品や生理用品は、避難所には、まだそんなに備蓄されていないでしょうから、皆様ご覧いただいて参考にしてください。